

## 資料

### 1. A. Adler 『生きる意味を求めて』より

子どもの探求のこの領域—きょうだい順位における子どもの立場—は決して十分論じ尽くされていない。それは圧倒的な明瞭さで、子どもがいかに関心したかについての印象を人生目標、運動法則、そしてそれと共に性格特徴を創造的に築くために利用したかを示している。分別のある人には、生まれつきの性格特徴を仮定する余地はほとんどないことが明らかになったことであろう。他のきょうだい順位の位置についてはこれまで論じたこと以上にもはや私はほとんど語る事ができない。ロンドンのクライトン・ミラーは、二人の娘の後に生まれてくる三番目の娘が強い男性的抗議を示すことを私に注目させた。私は、多くのケースで、彼の発見が正しいことを確信することができた。そして私はこのようなことが起こることを、このような少女が、両親の失望を推測して感じ取り、多くの場合〔実際に〕体験もし、女性の役割に不満であることを何らかの仕方で表現するからであると考えた。この三番目の娘に強い支配的な態度を見出しても驚くべきではない。これはシャーロッテ・ビューラー\*が「自然の反抗段階」として見出したとする事である。しかしそれは個人心理学の説明では、人為的所産、実際に、あるいはまちがって思い込まれた、軽視されていることへの持続する抗議と思えばよりよく理解できる。

男の子の中のただ1人の女の子、あるいは女の子の中のただ1人の男の子の発達については私の探求は完結していない。これまでの私の発見にしたがって、どちらのケースの子どもも、極端に、即ち、より男性的あるいは女性的な方向に向かうことを期待できる。女性的な方向に進むのは、そうすることが子ども時代に成功すると感じられたからであり、男性的な方向に進むのは、男性性が求めるに値すると見えるからである。最初のケースでは極端なまでの弱さと依存欲求が見られる。これにはあらゆる適切な、そして不適切な態度を伴っている。第2のケースでは、公然とした支配欲、反抗が見られるが、しかし時には勇気と尊敬すべき追求努力を見ることもできる。

（『生きる意味を求めて』“Der Sinn des Lebens” 岸見一郎訳, アルテ, 2007, p 195-196）

#### \*シャーロッテ・ビューラー (1893-1974)

ユダヤ系ドイツ系アメリカ人の発達心理学者。フライブルク大学とベルリン大学で自然科学と人文科学を学び、1918年、ミュンヘン大学で「思考の起源について：思考心理学に関する実験的研究」というテーマの論文で博士号を取得。同年、彼女はカール・ビューラーのもとで働くためにドレスデンに行き、児童・青少年心理学の分野で研究を続ける。1916年にカール・ビューラーと結婚。

1922年、ドレスデンで『若者の精神生活』( *Das Seelenleben des Jugendlichen* ) を出版。この本で初めて青年期心理学に発達の視点が用いられた。1923年ウィーン大学で教鞭をとり、1929年には准教授に昇進。その後数年間ウィーンに滞在する間、幼児・青年心理学を専門とし、研究と出版を通して国際的な名声を獲得し、シャルロッテ・ビューラーの「ウィーン児童心理学学校」の発展につながった。その精神は今日でもシャルロッテ・ビューラー研究所に受け継がれている。

1938年～1940年一家でアメリカへ移住。1942年、ミネアポリス総合病院の主任心理学者に就任。1945年にアメリカ市民権を取得し、カリフォルニア州ロサンゼルスに移り、ロサンゼルス郡立病院の主任心

理学者に就任。1958年に退職。退職後はビバリーヒルズで開業医として働く。

(Wikipedia から転用)

## 2. A. Adler 『個人心理学講義 生きることの科学』より

女の子ばかりの家族のただ 1 人の男の子の位置も困難で問題になります。このような少年は、女の子のようにふるまう、と一般に思われているからです。しかし、この見方はかなり誇張されたものです。(中略)

このような環境にいる男の子は、自分を必要以上に男らしく見せようとし、男らしいというこの特徴を誇張しようとし(19)。さもなければ、他の家族のように、女性的になるかもしれません。要するに、このような少年は、柔弱でおとなしいか、あるいは、野性的になります。後者の場合、いつも自分が男である、という事実を証明し、強調しようとしているように思えるでしょう。

男の子の中の女の子も、同じように、困難な状況の中にいます。非常に静かで、女性らしく成長するか、さもなければ、男の子のすることなら何でもしようとし、男の子のように成長したいと思います。このような場合、劣等感、非常に明らかです。なぜなら、男の子が優位である状況の中にいる唯一の女の子だからです。この「唯一の」と感じているということに、劣等コンプレックスのすべてが表現されています。男のような服を着ようとしたり、後の人生で、男性が持つと理解している〔放縦な〕性関係を持つとすると、〔劣等コンプレックスを〕補償する優越コンプレックスが発達していくのを見ることができます(20)。

訳注：

(19) このような事態も「男性的抗議」と呼ぶことについては、第 6 章注 (12) を参照 (136 頁)。

⇒ (12) このように女性であることが社会的に見て劣等性であるという場合に、女性が過度に自分の女性性を補償することをアドラーは「男性的抗議」(masculine protest) と呼んだ。この語は、女性についてだけでなく、過度に男性性を誇張する男性についても使われる。

(20) このような優越コンプレックスを「男性的抗議」と呼ぶことは、既に 134 頁で見た通りである。  
『個人心理学講義 生きることの科学』” The Science of Living” 岸見一郎訳、一光社、2001、p176)

## 3. A. Adler 『人生の意味の心理学』より

女の子ばかりの家族の中で育てられた単独子の男の子は、行く手に困難が待ち構えている。父親が一日の大半いなければ、まったく女性的な環境の中になる。母親、姉、妹、おそらくヘルパーしか見ない。自分が違うと感じ、孤立して育つ。これは女性たちが彼を束になっていじめる場合に当てはまる。彼女たちは皆で力を合わせて彼を育てなければならないと思うか、うぬぼれていい理由はないと言うことを証明したいと思う。多くの対立と競争がある。中間子であれば、おそらくは最悪の立場にいることになる。上と下の両方の側から攻撃されるからである。第一子であれば、後から非常に激しい競争者である妹から追われる危険がある。末子であれば、甘やかされる。

女の子ばかりの中の 1 人の男の子の状況はあまり好ましいものではないが、問題は、他の子どもたちに会うことができる積極的な社会生活を持っていれば解決される。さもなければ、女の子に囲まれて、少

女のようにふるまうかもしれない。女性的な環境は、両性が混じった環境とは非常に異なる。もしも仮定が標準化されず、その中の好みに従って整えられると、女性が住む仮定はこぎれいでさっぱりしており、色も注意深く選ばれ、無数の細部に注目が払われるだろう。男性と少年がいれば、それほどきれいに片付いてはいない。乱雑であり、騒がしく、家具が壊れている。女の子の中の1人の男の子は、女性的な趣味と人生について女性的な見方を持って成長する傾向がある。

他方、このような雰囲気強く反撃し、自分の男性性を強調するかもしれない。その時、常に防御する側において、女性に支配されないよう決心する。自分の個性と優越性を主張しなければならないと感じるだろうが、常にある程度の緊張状態にあるだろう。彼の成長は極端に進む。非常に強くなるように自分を訓練するか、非常に弱くなるように訓練するかどちらかである。男の子の中の1人だけの女の子は、ほとんど同じ仕方で、非常に女性的な性質か、あるいは、男性的な性質を發揮させやすい。その結果、生涯にわたって安全ではなく無力であると言う感覚につきまといられる。これは研究と調査に値する状況である。われわれはそれに毎日出会うことはない。それについて多くのことを言う前に、より多くのケースを調べなければならない。

大人を研究したときは、私はいつも子ども時代の初期に与えられ、その後のずっと残っている印象を見てきた。家族の中の位置は拭いがたい特徴を人のライフスタイルに残す。あらゆる発達の困難は、家族の中での競争と、協力の欠如によって引き起こされる。われわれの社会生活を見渡し、あるいは、実際、われわれの世界全体を見て、なぜ競争がそれのもっとも顕著な面であるかを見れば、人はあらゆるところで征服者になること、他の人を圧倒して優るという目標を追求していることをみとめなければならない。この目標は、子ども時代の初期における競争の訓練と、自分が家族全体の対等の部分ではないと感じてきた子どもたちが競争的な追求をしたことの結果である。われわれは、これらの不利を子どもたちを協力するようによりよく訓練することによってだけ、取り除くことができる。

(『人生の意味の心理学』” What Life Should Mean to You” 岸見一郎訳, アルテ, 2010, p 187)